



あれから26年、昨日は1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災の追悼の日でした。もう26年もたったのかと思うと、歳月の早さにおどろかされます。そして、あの震災を経験した人も少なくなり、そんなことがあったことすら知らない人がどんどん増えています。’

語り継ぐことの大切さを感じながらも、その手段として何をどうすればよいのか、毎年迷ってしまいます。今年は読売新聞に出ていた記事をそのままとりあげました。

「この赤ちゃんを温めてあげて」。震災直後の明け方でまだ暗いなか、神戸市東灘区の自宅マンションの外に出たときだった。近くにいた大人から突然、毛布にくるまれた生後間もない赤ちゃんを手渡された。崩れ落ちた隣の文化住宅から救助されたばかりだった。

傷もなくきれいな顔。すでに体は冷たかった。ぎゅっと胸に抱きよせ、頭や背中を必死でさすった。だが、ぬくもりはもどらず、泣き声もあげない。30分ほどして近くの大人に引き渡した。後に、赤ちゃんとその母親は亡くなったと聞いた。母親は出産で里帰りしていたという。「何もできなかった」と無力感が残った。

「今度は手を差し伸べられる人でありたい」。高校卒業後に看護の専門学校に進み、2003年に看護師になった。かけ出しのころ、兵庫県西宮市の病院の集中治療室（ICU）で食道がんの高齢男性を担当。手術後に別の病棟に移っていた男性は退院の際「ありがとう。これからはがんばって」と声をかけてくれた。「まだ怒られてばかりの時期だったのに」。医療がだれかを救えることを実感したという。

看護師になって18年。「寄り添う看護」を胸に刻んできた。今の職場は救命救急センター。かぜの子どもから新型コロナウイルスの重症患者まで、1日100人超の患者が訪れる。人の生死を分かたず場面に接することもある。「看護とは、少しでも患者さんや家族の苦しみ、悲しみに寄り添い、安心してもらうこと」と語る。

原点となった災害現場の医療にもたずさわってきた。05年4月のJR福知山線脱線事故では搬送された被害者の救急治療を経験。兵庫県災害医療センター（神戸市中央区）に移った後、13年のフィリピン南部地震で国際緊急援助隊医療チームの一員として現地に派遣された。救えない命に接する機会も多い。15年に行ったタンザニアではかぜをこじらせた赤ちゃんが目の前であえぎながら亡くなり、涙する母親の背中をさすり続けた。

「必要な人や物が限られ、情報もないなかで最良の医療を提供し、次の治療につなげる。救急と災害医療は共通する」と言う。国内外の被災地に何度も出向いた経験から、災害研修で講師を務めることもある。

被災地に行くたび、26年前に抱いた赤ちゃんを思い出す。「あの子にも将来があり、やりたいことがあったはず。一人でも多くの命を救える看護師になりたいと今も思う」。17日は勤務日。心のなかで手を合わせ、目の前の患者に向き合う。